

## 編集者のことば

『総合都市研究』36号は、センターの中期研究計画「東京を中心とする大都市の総合的研究における“大都市居住の環境整備に関する研究班”のうちの都市的生活様式・生活構造と社会サービスに関する研究チームの「特集号 大都市集合住宅地における生活様式」と名付け、その論文4編と、それ以外の論文3編、ならびに昭和63年度からセンターで開始した大都市高齢化社会の総合研究チームのメンバーによる公開講演会「東京の高齢化社会を考える」の記録により構成される。

特集号として研究成果をまとめた上記チームの中心的テーマは、都市的生活様式の理論的実証的解明であり、これとの関連で個人の生活構造やライフスタイルも問題にしているが、焦点は都市生活の生みだす共通・共同問題がいかなるシステムのもとで共同的に処理されているかを把握することであった。このため、まず共同処理システムが比較的に見えやすい東京都神津島村で試行的な調査を行い（本誌第23号、第25号など）、その後、東京23区内の集合住宅地を対象とする調査を積み重ねてきた。この報告における4編は、練馬区光が丘の集合住宅地を主たる対象としているが、板橋区中台や品川区八潮の集合住宅地の調査結果との比較も試みている。

最初の論文では、光が丘の集合住宅地が公用分譲・同賃貸・都営などの建築主体によって造成されたことを踏まえ、それぞれの住宅ごとの住民の社会経済的地位が明確に異なり、住宅階層とも呼ぶ内容をもつこと、またそれに伴い各住宅地ごとに共同処理のしかたもちがいがみられることを明らかにしている。次の論文は、公用分譲の住宅地に焦点をあて、同じ分譲住宅地といえども管理組合の組織構成の差異が、住民の組合活動への参加を規定する一要因となっていることを明らかにし、またこれを通して共同処理の中に住民参加を如何に組み込むかを考察している。3番目の論文は、住民参加が組織特性に規定されているとともに、家庭内関係とりわけ夫婦関係によって規定される点を重視し、主婦の社会参加と夫婦関係との関連を分析した。4編目は、住宅階層と生活不安をテーマとし、品川区八潮との比較分析も含みながら、生活不安のタイプ-近隣関係や子供の教育に関する不安から老後の不安に至るまで一ごとに、そのような不安を生み出す要因の連関を詳細に論述している。

以下、一般論文で石田は、森 鷗外の弟の三木竹二が兄の論文「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」を骨子として書いた戯曲が表題のそれであり、演劇研究面ではあまり注目されなかったが、当時の市区改正論の見地からは大変興味深いものであり、それを紹介・論評した。若林ほかの調査のフィールドは地方小都市であるが、調査対象高齢者の子供の55%が首都圏に住むことが明らかとなり、東京との結びつきは高く、また高齢者の実態につき大都市で行ってきた成果（例えば、本誌第25号など）との比較は興味ある課題である。秋山はハンディキャップ者交通対策の一連の研究の展開の一つとして、その歴史的経緯をとりまとめるとともに、それらの問題点を論じた。

公開講演会は、昭和63年9月26日（月）午後6時から2時間、中央区の東京都勤労福祉会館で本センターが主催したものであり、40歳台を中心に広い年齢層の150有余名の参加者をえて実施された。記録は、倉沢所長の趣意説明と3名の講演者の講演収録録である。なお、センターでは、以後定期的に研究成果を公開講演会で発表するとともに、都市研究叢書としても刊行していく予定である。

望 月 利 男